

もの想いに関する覚書

富田悠生 明星大学心理学部

キーワード：もの想い， α 機能，コンテイング，投影同一化

要約

本稿では、Bionによって示された「もの想い reverie」について、Bion 自身による記述に加え、現代の精神分析家による定義、および技法の展開について若干の検討を加えた。

Bion は、投影と再取り入れの理論としてのもの想いから、 β 要素から α 要素への変形をなす α 機能としてのもの想いへと展開させていった。その背景には、Vermote が指摘するように後期 Bion においては、表象化されず思考できない、体験することしかできない水準でどのような心的変化が生じるのか、という領域に視点が移ったことが関連しているものと思われる。

Ferro, Barros, Ogden, Birksted-Breen, Busch といった現代の精神分析家は、Bion の論考を咀嚼しながら、もの想いを再定義している。彼らの定義は、無意識的・前意識的水準から意識的水準まで幅広く、表現される形態も、視覚像や小説、夢、ありふれた日常的な何か、のように様々である。しかしいずれも意識的な歪曲を避け、こころの本質に迫ろうとする試みであると言える。

また技法の観点から Ferro による分析家のなかでセッション後にも継続されるもの想いや、Birksted-Breen による何かが生み出されるとき、何かとそれ以外の何かとの間隙、喪失を維持する反響の時間といった概念を紹介した。

I はじめに

精神分析的な心理療法において、治療者は患者から意識的、無意識的なメッセージを受け取り、理解し、情緒的なインパクトを伴う言葉によって解釈する。そして患者は、その解釈を意識的／無意識的に受け容れ、それをきっかけとして自身の内的な体験様式を変化させ、より現実的な世界を生きるようになる。

治療者が患者から何らかのメッセージを受け取るとき、精神分析的なアプローチでは、どのように説明されるのだろうか。例えば内的・外的な治療設定が維持され、治療者と患者によって転移／逆転移が形成されたとき、その特異な関係性を通じて患者が伝える何かを治療者は受け取ってい

る。このモデルにおいては、治療者が患者からの投影同一化 (Klein, 1946 / 1985) を受け取って、それを逆転移に通じて感知し、理解に結びつけるという内的交流が想定されている。これは、いわゆる無意識の意識化を目指した考え方である。

一方、患者から投げ込まれる β 要素を、治療者の α 機能によって α 要素に変換し、理解に結びつけ、解釈するというコンテイング containing もまた、重要なモデルである。コンテイングにおいては、患者の言葉にならない何かを治療者がもの想いを通じて、受け取っていると言える。これは意識的な水準で考えるというよりも、前意識・無意識的な領域における治療者と患者との心的過程の醸成に焦点づけられている。これらの β

要素, α 要素, α 機能やもの想いといった概念は, Bion によって提出されたものである。Bion は精神分析臨床を生きた状態のまま, 一定の価値判断に染まらない形で文字に起こそうと企図した人物であろうと私は思う。故に難解で哲学的に見え, 極度に抽象度の高い表現が多用されているのであろう。実際の臨床場面は, 一元的な理解が成立するほど単純ではなく, 非常に複雑で多面的である。人間が, どこまでそれを理解することができるのかは分からないが, 臨床の実態とはそういうものではないだろうか。しかし, 概念によって臨床場面を説明しようとするとき, どうしても一部を切り取って単純化することになってしまう。このような臨床概念が抱える負の側面を嫌い, Bion は徹頭徹尾, 多義的な記述によって精神分析臨床を表現したのではないかと私には思える。

他方, 現代を生きる我々には, Bion の仕事を如何に読み解くかという課題が残されたように思う。その意味では幾多の思索の跡を残し, 後世の分析家にその後を託した Freud と同じなのかもしれない。本稿では, まず Bion による「もの想い」を紹介し, その後の分析家によって進められた「もの想い」に関する臨床研究について, 若干の考察を加えることを目的としたい。

II Bion によるもの想い

もの想い reverie は, 精神分析的臨床において近年, 重要な概念として注目されている (Hinshelwood, 1991 / 2014 ; 松木, 2017a)。

もの想いは, 投影同一化の概念を基盤としたコンテイングに付随する論考である。Klein (1946 / 1985) は投影同一化について, 子どもが攻撃衝動を分裂させ母親の中に投影するとき, 子どもにとって母親は悪い自己の一部をもつ別の対象ではなく, 悪い自己そのものになってしまうと述べた。患者は治療者に自分の一部を投げ込み, 治療者は患者の一部となるという, この知見は逆転移を抑制するだけでなく治療に生かすという視点

(Heimann, 1950 / 2003) を導いたが, 同時に Bion によって提唱されたコンテイングの基盤ともなっている。Bion がコンテイングを示したとされる箇所は, 『連結することへの攻撃 (1959 / 1993)』における以下の一節であろう。

…患者は, 幼児の頃に, 子どもの感情表出に従順に対応した母親を体験してきている, と私は感じた。この従順な対応には, 「子どものどこが具合が悪いのか私には分からない」とのいらだった要素があった。その子どもが欲しがっているものを理解するためには, 幼児の泣き声を, 母親にいて欲しいという要求以上のものとして母親が取り扱うべきだったというのが私の推測である。幼児の立場から見れば, 母親は, 死につつあるとのその子どもの恐怖心を彼女のなかに取り入れ, そんなわけだったのかと体験すべきだった。子どもが包み込む contain ことができなかったもの, それがこの恐怖心だった。彼は, 恐怖心が巢食っている人格部分とともに, その恐怖心を分割して吐き出して, それを何とかして母親のなかに投げ入れようとした。ものわりの良い母親なら, この赤ん坊が投影同一化によって懸命に取り扱おうとしているそら恐ろしい感情を体験でき, それでも平穏な顔を保っていられる。そういった感情を体験することにもちこたえきれずに感情の侵入を否認するか, 幼児の感情の取り入れから起こって来る不安にとりつかれてしまう反応をする母親を, この患者は相手にしなけりなかつた。(p.104 / 訳書 p.118, 傍線部は筆者)

上記の論文で Bion は, 乳幼児が母親に分裂排除させた恐怖を母親が体験しうることが必要であると記述している。これが現代におけるコンテイングの枠組みである。訳の分からない情緒的発散に見える, この子どもの泣き叫びから死ぬほどの恐怖を受け取ること一徹密には投影と再取り入れに関する理論ということになるのかもしれない

が一がコンテインということになるだろう。

また Bion は、下記の『考えることに関する理論（1962a / 2007）』のなかで、母親が乳幼児が投影した恐怖を取り入れ、保持できる状態を“もの想い”として記述した。そして、乳幼児が取り入れられる状態にしたうえで、乳幼児が再取り入れできるように返すことによって、発達が促されると述べている。

…乳幼児と乳房との間の関係が、感情、例えば乳幼児が死につつあるという感情を母親の中へと投影し、それが乳房の中で憩うことで乳幼児の精神にとって耐えられるものにされた後に、乳幼児がそれを再取り入れすることが許されるならば、正常な発達がそれに引き続いてくる。その投影が母親によって受容されないと、乳幼児はその死につつあるという感情の持っている意味が剥奪されると感じる。したがってそれは、耐えられるものにされた死につつあるという恐怖ではなく、名状なき恐怖 nameless dread を再取り入れする。

母親のもの想い reverie の能力の破綻によって、未完成のままに残された仕事が、原初的な意識の上に課される。それらは、程度は様々だが、すべて、相互関係にかかわる機能と関連している。（p.116 / 訳書 p.122、傍線部は筆者による）

そして、下記に示す『経験から学ぶ（1962b / 1999）』では、母親のもの想いを通して、乳幼児の思考が発達することを明確にした。いわゆる思考作用 thinking の理論である。また快 - 不快原則に従って、ここから排出されるだけの思考である β 要素を、自己に理解されうる原始的思考である α 要素に変形する α 機能について言及している。

…母親のもの想い reverie のための能力は、ここでは内容から分離できないと考えられている。というのも明らかに、一方は他方に依存している

からである。もしも授乳する母親がもの想いを分かち与えることができないか、もの想いを分かち与えるが子どもやその父親への愛情に裏打ちされていないと、この事実は、たとえ乳児に理解不可能でも乳児に伝達されるだろう。心的な質は、交流の通路すなわち子どもとの結合に伝えられるだろう。何が起きるかは、これらの母親の心的な質と乳児の心的な質に対するその衝撃による。というのは、母親の乳児に対する衝撃は、カップルとそれを構成する個人の発達から見ると、 α 機能による変形作用に従う情動的経験だからである。もの想いという用語は、ほとんどどんな内容にも当てはまる可能性がある。私はそれを愛情が憎悪に満たされた内容ののみのためにとっておくことにしたい。この限定された意味で用いると、もの想いは、もの想いする者が愛している対象に由来するどんな「対象」をも自由に受け取れる心の状態であり、だから乳児が良く感じていても悪く感じていてもその投影同一化を受け容れることができる。短く言えば、もの想いは母親の α 機能の因子である。

…欲求不満に耐えることができる乳児は、現実感覚を持つこと、つまり現実原則に支配されることを許容できる。もしも乳児がある限度を越えて欲求不満に耐えられないと、万能的なメカニズム特に投影同一化が働き始める。これは、現実原則が支配的なとき思考のための能力に、欲求不満を和らげる手段としての価値があると気付いていることを暗に含んでいるので、まだ現実的とみなされるかもしれない。しかしその有効性は、母親にももの想い reverie のための能力が存在することに依存する。もしも母親が失敗すると、今や乳児の思考の欲求不満に耐える能力自体が試練に曝されるので、それはさらに重荷が掛けられる。私はここで、投影同一化がのちに思考作用のための能力と呼ばれるものの早期の形態であると想定している。欲求不満に耐える非常に高い能力を与えられた乳児は、もの想いする能力がなく、ゆえに乳児

の心的欲求に対して供給できない母親の試練を生き残るかもしれない。反対の極の、欲求不満に耐える能力が非常に低い乳児では、もの想いできる母親との投影同一化の経験でさえ、破綻なく生き残ることはできない。(p.p.36-37 / 訳書 pp.48-49, 傍線部は筆者による)

その後、BionはGridによって思考の発達過程を示し、「O」や「記憶なく欲望なく理解なく」といった前意識・無意識的な水準の心的交流へと議論の焦点を移していく。もの想いという用語は、後期のセミナーなどでもほとんど言及されていない。

Ⅲ もの想いに関するその後の臨床研究

1 定義として

Busch (2018, p.569) は、ベルギーの分析家 Vermote (2011) の前期 Bion と後期 Bion の違いに関する考察を援用しながら、形態としてのもの想いをどのように理解するか、またもの想いによってどのように精神分析的臨床を行うのが良いのかという観点から、もの想いを検討している。

一般的に、Bion が英国に滞在していた時期は前期 early Bion、一方、晩年米国西海岸に活動の拠点を移して以降の時期を後期 late Bion とされる。Vermote は、『変形 (1965)』の最後に転換が生じ、その5年後の『注意と解釈 (1970)』では完全に転換されていることを示唆している (Taylor, 2011, p.1099)。後期 Bion における代表的な仕事は、精神分析の本質は「O」になることであるという考え方、知らないことに持ち堪え、真実を直観するために必要とされた「記憶なく欲望なく理解なく」といった態度などであろう。しかし後期 Bion には、特に英国の分析家からは、観念的で哲学的過ぎるという批判が絶えないと言われている。Vermote (2011, p.92) は、何かがどのように表象となるのか、という部分に

焦点を当てている前期 Bion に対して後期 Bion は、表象化されていない、分化されていない水準で何が起こっているのか、また分析家には知覚されない、この水準では、どのような変化が生じるのかという部分を考察し始めていると述べている。Vermote (2011) は、前期 Bion と後期 Bion の理論と実践を結合させる、すなわち異なる知覚水準における心的変化を複合的に扱う「複線 dual track」モデルを提唱した。また、Taylor (2011, p.92) Vermote の考察に賛意を示し、後期 Bion は精神分析的臨床において適切な手続きであるはずの臨床的予測、確信を伴う分析家の観察という「仕事」が弱点となることを示唆したと記述している。

Busch (2018) は、Da Rocha Barros と Ferro, Ogden によるもの想いの概念の捉え方を対比させながら検討を加えている。Barros と Ferro は、分析家のところに訪れる、強い情動的要素を含んだ驚くべき夢のようなイメージ surprising dream-like image としてももの想いを捉え、両者は視覚像 pictogram という用語を用いている。Barros (2000, p.1094) は、情動的体験の心的表象における、非常に早期の段階としての視覚像の存在を示唆している。それは、夢思考の形成に至る象徴を形成し、思考過程の初期段階である。また Ferro (2002, p.185) は、刺激から視覚像 visual pictograph や表意文字を形成すること、言い換えれば、各々の一連の刺激の情緒的結果として詩的イメージ poetic image を同時に生むことが分析家の仕事の中心であると述べる。両者はともに、患者の未だ表象化されていない情緒を捉える方法として、分析家のところに強い情動的イメージが現れると仮定しており、またそれは非言語的な象徴を言葉として表象された思考へと変容させる可能性を持っていると考えている (Busch, 2018, p.573)。

さらに、Ferro (2008) は、『もの想い—自由

なところ』という著作の冒頭において、以下のよう
に述べている。

全てのもの思いは、すなわち私たちのところの
仮説的な変形の過程によって格納されている全ての
イメージは、1つの物語に繋げられ、接続され、
患者と分かちあわれ得る一貫した物語となってい
なければならない。それは、急激さと分析家の内
部にある原始 - 感覚的状态の投影によって生まれ
る。それゆえ、物語は分析家によって予め構成さ
れている物語ではなく、彼／彼女（分析家）の理
論や知識の所産でもなく、セッションで現出した
様々なもの想いの積み重ねや産物として生まれる
のである。（p.24、括弧内は筆者による加筆）

ここで強調されているのは、もの想いは予め思
考されうる知的な水準ではありえないこと、また
イメージが1つの物語として連結されているとい
うことである。この著作には、小説のような短
編が幾つも収録されている。もの想いによるイ
メージの接続からなる物語として、これらの短
編が著されていると思われる。まるで Bion 晩年
の著作『未来の回想（1990）』のように見える。
Bion はこの著作のなかで「私は、フィクション
のなかに逃げ場を探し求めるように強いられた。
フィクションに見せかけながら、真実が機会をみ
て漏れ出て来る」と述べており、真実が表される
形態は問題ではなく、むしろ形態にこだわること
で制限を与えてしまうこと、そこから自由になる
ことが真実をそのまま伝えることになる、と試み
ているかのようである。

一方、Ogden は様々な種類の心的、身体的状
態をもの想いとして捉えている。Ogden（1997
／2006、p.568、訳書 p.99）によれば、もの想
いは「私たちの反芻的な想念であり、白昼夢であ
り、空想であり、からだの感覚であり、つかのま
の知覚であり、半分眠っている状態から生じてく

るイメージであり、ふと私たちのところをよぎる
曲やフレーズであり、その他いろいろのものであ
る」とされる。その後も Ogden（2017、p.5）
は、「もの想いは配偶者との議論に関する考えや、
歌の歌詞、2歳の頃に倒れたときの感覚、幼少期
の買い物メモといったありふれた日常の形態をと
る」と述べている。Ogden によるもの想いの定
義は意識の水準に近く、連想ともとれるものであ
る。また Ogden は自身の分析的第三者 analytic
third ともの想いを結び付けている。分析家と患
者双方のもの想いが弁証法的な相互作用を通じ
て、分析的第三者が形成されると考えている。松
木（2017b）は、Ogden の考え方は、Bion の「目
覚めていて夢見ること」をなぞっていると示唆し
ている。Ogden によるもの想いは、自身の技法
のなかに位置づけられているように見える。

また、Birksted-Breen（2016、p.30）は、「も
の想いはところに表象としてやってくるイメージ
やメタファーと同様ではなく、素材から生まれる
意識的な何かと全く関係ない、「思考」よりも夢
のイメージに近い」と述べている。また、母子関
係のモデルを基にしていることから、もの想いは
母と子の結びつきと同様、分析家と患者の情緒的
結びつきに関連していると考察している。Bion
は元々、母子関係の在り方として reverie を論じ
ており、これはその原点に立ち返るかのような指
摘である。

さらに、Busch（2018、p.583）自身は、「分
析家のところに突如現れるイメージが変容した分
析過程を理解するために役立つ重要な可能性を
持っている」と述べている。突然現れるイメージ
という言葉は、Böhm（1992）のターニングポ
イント論を連想させる。Böhm もまた、患者の
心的変化には一貫した転移解釈による緩徐とした
変化と、ある局面において突然現れる予期せぬ変
化を指摘し、後者をターニングポイントと捉えて
いる。

このようにもの想いの定義は、無意識的・前意

識的水準から意識的水準まで幅広く、またそれゆえ、その表現された形態も、視覚像や一見すると無関係にも見える小説や夢、ありふれた何か、というように様々であることが示されている。しかしいずれも、人間の意識的な歪曲を避け、こころの本質に迫ろうとする試みであると言える。

2 技法として

ものの想いを技法として議論するとき、その概念的違いはどのように生まれるのだろうか。Busch (2018) は、分析家のものの想いそのものによって変形が起きると考えている Ferro と Ogden, 患者の連想や言語的行為、感情の文脈のなかでもものの想いの意味を象徴化していく必要性を示した Barros を比較し論じている。

Ferro (1996 / 2002) は、以下のように述べている。

問題は、分析家のこころが現在、どれくらい患者の不安を受け取り、変形させているかということである。それは分析家の理論が含む程度とは無関係である。本質的な点は、セッションで生じた微細な変形の立場にあって、実際に行ったことである。分析家が行っていると考えていること、分析家が行っていると考えていることに対する言語的表現とは無関係なのである。(英訳書 p.9, 傍線部は筆者によるもの)

ここで Ferro は、知的に理解しようとするこころ、そして理解した結果とは関係なく、行為として何をしたのかという点を強調している。つまり、行為のなかに未消化な何かが隠されていると見ていたのであろう。また Busch (2018, p.575) は「Ferro は、患者が思考し、感じ、夢みる能力は、解釈それ自体よりも分析家のこころのなかで生じていることに基づいていると考えている。彼は、セッション後に未消化な要素を変形する分析家の能力が、その後のセッションにおける患者の反応

に影響を与えると確信している」と述べている。つまり、セッションの後であっても分析家のなかで、より原始的な思考の過程が進んでいると捉えているのである。患者を目の前にした here and now とは離れた過程を想定していると言える。確かに、私たちは精神病的な患者から投げ込まれた不安や恐怖を、セッション後に別の形で、多くはパーソナルな形で実感するという経験を持っている。

また、Birksted-Breen (2003, p.1505-1506) は、母親が乳児から投げ込まれる原始的な投影同一化に長期間耐え、変形が生じるまで熟成する時間を「反響の時間 reverberation time」としている。反響の時間は、ある部分とそうでない部分の一時的な隙間を維持する、他の何かへと変形に導く喪失の瞬間を保持するというものである。またその隙間において、意味が形成されるとされる。つまり、反響の時間においては、ある感覚が別の原始的思考へと変形する際の橋渡しをするものと思われる。

IV 結語

Bion の書籍や講義録を読むと、とても疲労してしまう。表現が曖昧で分かりにくいことも勿論だが、自身の理解が正しいかどうか自信が持たないため、迷いが生じることもまた、疲労を生む原因ではないかと思う。「この理解で合っているのかな」といつも思わされてしまうのである（そして時々、諦めてしまう）。Bion に関しては私的な理解に過ぎない。本稿ではなるべく引用箇所を明確に記すよう努めた。

Symington & Symington (1996 / 2003, 訳書 p.87) によれば、ものの想い reverie の語源はラテン語の radix (根 root) であり、その後、reberere (激怒する) となり、古フランス語の resverie (喜びの状態、暴力的ないし乱暴な言葉、狂気)、そして rever (夢みる) という変遷を辿ったという。こころの激しい動きを連想させる語源

である。ものの想いが無意識・前意識と原始的思考を結ぶものだと仮定すれば、その激しさにも頷けるのではないだろうか。

文献

- Bion, W. (1959). Attacks on linking. *International Journal of Psychoanalysis*, **40**, pp.308-315.
- 中川慎一郎 (1993). 連結することへの攻撃. 松木邦裕 (監訳). メラニー・クライントゥデイ—精神病者の分析と投影同一化. 岩崎学術出版社.
- Bion, W. (1962a). A theory of thinking. *International Journal of Psychoanalysis*, **43**, pp.306-310.
- 中川慎一郎 (訳) (2007). 考えることに関する理論. 松木邦裕 (監訳). 再考—精神病の精神分析論. 金剛出版.
- Bion, W. (1962b). *Learning from experience*. Heinmann.
- 福本修 (訳) (1999). 経験から学ぶ. 精神分析の方法 I. 法政大学出版局.
- Bion, W. (1990). *Memoir of future*. Karnac Books.
- Birksted-Breen, D. (2009). 'Reverberation time', dreaming and the capacity to dream. *International Journal of Psychoanalysis*, **90**, pp.35-51.
- Birksted-Breen, D. (2016). Bi-occularity the functioning mind of the analyst. *International Journal of Psychoanalysis*, **97**, pp.25-40.
- Böhm, T. (1992). Turning points and change in psychoanalysis. *International Journal of Psychoanalysis*, **73**, 675-684.
- Busch, F. (2018). Searching for the analyst's reveries. *International Journal of Psychoanalysis*, **98**(3), pp.569-589.
- de Rocha Barros, E.M. (2000). Affect and Pictographic image. *International Journal of psychoanalysis*, **81**, pp.1087-1099.
- Ferro, A. (1996). *Nerra stanza d'analisi: Emozioni, racconti, trasformazioni*. Raffaello Cortina Editore.
- Slotkin, P. (trans.) (2002). *In the analyst's consulting room*. Brunner-Routledge.
- Ferro, A. (2002). Narrative derivatives of alpha elements: Clinical implications. *International Forum of Psychoanalysis*, **11**, pp.184-187.
- Ferro, A. (2008). *Reveries: An fettered mind*. Karnac Books.
- Heimann, P. (1950). On Counter-transference. *International Journal of Psychoanalysis*, **31**, pp.81-84.
- 原田剛志 (訳) (2003). 逆転移について. 松木邦裕 (監訳) 対象関係論の基礎—Kleinian Classics. 新曜社, 173-190.
- Hinshelwood, R.D. (1991). *A dictionary of Kleinian thought*. Free Association books.
- 衣笠隆幸 (総監訳) (2014). クライン派用語辞典. 誠信書房.
- Klein, M. (1946). Notes on Some Schizoid Mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis*, **27**, pp.99-110.
- 狩野力八郎・渡辺明子・相田信夫 (訳) (1985). 分裂的機制についての覚書. 小此木啓吾・岩崎徹也 (編). メラニー・クライン著作集—妄想的・分裂的世界. 誠信書房, 3-32.
- 松木邦裕 (2017a). 精神分析の一語. 第20回もの想い (1). 精神療法 **43**(5), p.p97-104.
- 松木邦裕 (2017b). 精神分析の一語. 第21回もの想い (2). 精神療法 **43**(6), p.p97-101.
- Ogden, T. (1997). *Reverie and Interpretation: Sensing something human*. Paterson Marsh and Jason Aronson.
- 大矢泰士 (訳) (2007). ものの想いと解釈—一人

- 間的な何かを感じ取ること. 岩崎学術出版社.
- Symington, J. & Symington, N. (1996). *The clinical thinking of Wilfred Bion*. Routledge.
- 森茂起 (訳) (2003). *ビオン臨床入門*. 金剛出版.
- Taylor, D. (2011). Commentary on Vermote's 'On the value of 'late Bion' to analytic theory of and practice. *International Journal of Psychoanalysis*, **92**, pp.1099-1112.
- Vermote, R. (2011) On the value of 'late Bion' to analytic theory of and practice. *International Journal of Psychoanalysis*, **92**, pp.1089-1098.
- Taylor, D. (2011). Commentary on Vermote's 'On the value of 'late Bion' to analytic

Notes on Reverie

TOMITA, Yuki
Department of Psychology, Meisei University

Key Words : reverie, alpha-function containing, projective identification
